
アルナベルツ戦記 First Priority 世界の果てで響く終焉唱

優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルナベルツ戦記 First Priority 世界の果てで響く終焉唱

【Nコード】

N3437Z

【作者名】

優希

【あらすじ】

クロムは父を裏切った者たちが嫌いだった。しかし、父の使いで嫌いなエルスティナに赴くことになりその末、世界を賭けた戦いに投じることになる

崩壊した城跡に少年と女性が訪れていた。

二人は廃城を見上げる。ここは北にあるベルマーレ大陸のエルステイナ城、二十三年前まで人々によって繁栄していた。しかし、最期の後継者を失い崩壊してしまった。

+

アルナベルツには四つの大陸と五つの種族が存在する。

南の大陸には神族のシュヴァンテ。

西の大陸には魔族のヴォルザクディオ。

東の大陸には聖族のリーズリオ。

北の大陸には人族のベルマーレ。

最後は夜者、二十年前に起きた人族解放戦線の影響より新たに生まれた種。彼らは森の奥深くでひっそりと暮らしている。

夜者は呼び名にあるように夜にしか生きられない。

太陽に弱く、太陽の光を浴びすぎてしまうと弱り死に至るといふ。

そんな物語は北の大陸・ベルマーレから始まった。

+

王都エルステイナでは人族解放二十周年祭の前夜祭で街は賑わって

いた。

商店街も居住区も飾り付けで大賑わいだ。

「祭りか？騒がしい・・・」

黒いフードマントを身に纏った男が王都に足を踏み入れた。

「さつさと用事を済ませて帰りたいんだけど・・・人が多いな、路地から廻って行くか」

彼の名はクロム。

彼は路地を歩いていく。目指すはエルステイナ城。

「離して下さい」

突然、叫びにも似た声が飛び込む。

路地奥の先に女性がガラの悪い男二人組に絡まれていた。

「ちよと奉仕して欲しんだよ。良いだろ嬢ちゃん」

「離して下さい。人呼びますよ」

「最高の快感を味あわせてやるから。きつと気に」

ドカツとガラの悪い男の一人が壁に叩きつけられ張り付いていた。それをしたのはクロム本人。

「何さらすんじゃガキ」

「大の大人が女の子を寄つてたかつて、恥ずかしくないのかよ」

「うっせんだよ。ガキはすっこんで」

クロムは悪男の一人の話を最後まで訊かずに跳躍すると顔面めがけて蹴り壁に叩きつけた。

「今時あんな誘い方する奴がいるなんてな」

「あの、ありがとうございます。助かりました」

少女は深々と頭を下げた。

「ああ、別にいいよ。じゃ、僕は用事があるので、これで」

「どこかに行かれるのですか？お急ぎのようですね」

「・・・城に」

「お城、お城と申しますと、エルステイナ城ですか？」

「ああ、父さんのお使いでね」

「それでしたら、御一緒させて下さい。わたくしもエルステイナ城

に向かっていたいましたの。あっ、わたくしはシーラです。あなたのお名前をお訊かせ下さい」

「……クロム……クロムだ」

十

「どうしてダメなんです」

「正式な手続きをとっていただかないと謁見は許可できません」

「緊急なんだ！」

城の入り口で警備兵と耳の尖った神族の女性と耳の長い魔族の男性が言い合っていた。

「どうかなさいましたの？」

「あっ、皇女様。彼らが女王陛下に謁見を求めておりまして」

「君はこの国のお姫様だったのか？」

「ごめんなさい。あまり口外するなどお母様から言われていますので……この方々を入れて差し上げなさい」

「ですが」

「わたくしが許可します」

「はっ、仰せのままに」

十

クロム、シーラ、神族の女、魔族の男。4人は謁見の間に通された。

「よくいらつしゃいました。ではさっそく、そちらのフードマントの方から用件を聞きましよう」

クロムは一步前に出た。

「女王陛下。先に言っておきます。これからアナタに敬語は使いません」

警備兵やシーラたちはあまりにも大胆なことに言葉を失った。

「構いません。よろしいでしょう」

「ぼくがここにきたのは父さんのお使い、ただそれだけだ」

クロムは一步づつ女王に歩み女王を護る警備兵二人のところまで近づいた。

「これ以上は許可できない」

「下がりましたえ」

「アナタらの影借りるよ」

瞬間、クロムの言葉と共に警備兵二人の影に一本づつ腕を突っ込んだ。

警備兵だけでなく周り全ての人々が驚いていた。

影から腕を抜くと両手には剣が握られていた。

金と銀の剣。

それを、床に突き立てた。

「これをアナタに返しに来た」と、クロムは淡々と答えた。

「その剣は！あなたこれをどこで……」

「父さんから預かった。返しに行ってくれってな」

「アナタの名をお聞きしても」

「クロム・ヴァルシオネ・ケインツベル。アナタの察しの通りぼくは夜者だ」と、クロムの黒い瞳が女王を睨み付けた。

周りがざわつき始める。そう夜者という言葉に、夜者とは夜にしか生きられない種。昼に出れないことはないが太陽が照り返している時にこの場にいること驚いているのだ。

「では、父の名は」

「父さんの名はユウキ・デイガイト・フライア・ケインツベル。……」

「……」

「じゃ、ぼくはこれで失礼する。目的も果たしたし、アナタのそば

に居したくないから」と、女王に背を向けると謁見の間から出ていった。

「……お母様……」

シーラは心配そうに女王を見つめる。

女王は椅子から立ち上がると床に突き立てられた金と銀の剣を握った。

「懐かしい……わたし……わたしは……」

女王の瞳からとめどなく涙があふれ出ていた。

「……裏切った……裏切りたくなかった……でも、だけど……ただ背徳種だからという……理由で……」

「シーラや他のみんなは、なんと声をかけていいかわからず、ただその姿を見ていることしか出来ない。」

「……裏切ってしまった……わたしは、わたしたちは……英雄なんかじゃない……」

その言葉に周りの人々はどよめいた。

「本当の、英雄は……英雄は……」

今から約百五十年前、神族と人族間で戦争があった。

神族の法力に対して人族は特別な力を持っていたわけではない。物と物を合成させる合成練金で対抗した。

しかしその結果は目に見えていた。

勝てる相手ではないことは解っていた。

神族は法力で人族を圧倒、勝利した

それ以降、人族は奴隷として扱われるようになった。

そして二十年前、人族解放戦と呼ばれる争いが起こり人族を解放に導いた三人の英雄。

神族のゼウデイス・エスタシオ

魔族のミール・ゴードイス

そして、人族のアルシエール・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ

しかし、それは結果的にそう呼ばれることになっただけである。

権力を持つものが真実を葬り偽りの真実を示した。

その結果が三族の英雄譚。

「本当に人族を解放に導いたのは彼、ユウキよ。……………彼が真に本当の英雄なのよ……………」

十

日は沈みかけていた。

夕日の眩しさを感じながら噴水中央広場に設けられたベンチにクロムは腰をかけていた。

「祭りがそんなに楽しいか？理解できん」

「ようやく見つけました。こんなところにいらしたのですね」と、聞き覚えのある声がクロムの耳に届いた。

「皇女様か？ぼくに何のようだ？」

「クロム様」

「アンタにそう呼ばれる筋合いはないな」

「……………わたくしの事、お嫌いですか？」

「……………正直に言おう。嫌いだな！」

「っ！……………やはり、お母様の所為なのですか？」

「偽りの三英雄に関わる者。例外なく全てが嫌いだよ！」

「……………偽り……………確かに、そうかもしれません。ですが……………」

「なんだ！」と、シーラを睨み付ける。

「……お母様に、お訊きしました。二十年前の人族解放戦線の事を……確かにお母様や他の方々は貴方のお父様を裏切つてしまいました。ですが、それは……」

「父さんが背徳種だからか？」

「……そう、です」

そのシーラ言葉にクロムは感情を爆発させた。

「人族の次は背徳種差別か！父さんが何をした！人族を解放に導いた。ただそれだけだろ！神族と魔族のハーフ。そののなにが悪い！父さんの両親が愛し合っていたからこそ父さんが産まれた！違うか！」

シーラはクロムに反論しようと言葉を探すが見つからない。正論を並べるクロムに言い訳なんて通じない。

「アンタもアイツラと同じって事だ！人の行為を無にして、有り難みすら分らない。しまいには真実を葬り、真実を知ってもなお、その真実から目を背け事実を受け入れない！」

シーラはクロムの視線から反らした。

「救いようがないな……ぼくが夜者になったのは父さんの所為だ。だけどぼくは、父さんを恨んだりはしない。確かに最初は恨んでいた。けれど父さんは自分で招いた結果を悔やんで償おうとしている。だが偽りの三英雄共はどうだ。何もしようとしてない、ただ平和になつた世界を謳歌しているだけじゃないか！」

「……」
シーラはかける言葉が見つからず無言のまま唇を噛みしめた。クロムの言っていることは正しかった。

お母様や他の三英雄は何もしてこなかった。ただ生きてきただけ、シーラは一番近くでそれを見てきた。だから、嫌というほどよく分かる。

「もう会うことはないだろ。じゃあな、皇女様」

クロムは正門に向け歩きだした。

「！今から王都の外に出るおつもりですか？」

「さっきまで泊まっていこうかと思ってたけどやめた」

「・・・・・・・・わたくしが居るからですか？そうやって人を避けて生きていくおつもりですか？」

「避ける？違うな避けているのはアンタラだろ。夜者という種を避けている。違うか？」

日が沈みきっていた。

クロムはフードを脱ぎ顔を露わにした。

「・・・・・・・・世界から弾き出された種族。・・・・始めて、見ました」

「これ以上アンタと話しても無駄だ」と、今度こそ歩みを止めることなく正門を潜っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437z/>

アルナベルツ戦記 First Priority 世界の果てで響く終焉唱

2011年12月11日20時52分発行